大塚 敬節
矢数 道明 責任編集

近世漢方医学書集成

112

中川修亭

名著出版 刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 112 中川修亭 第Ⅳ期 全16巻

昭和五十九年二月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七―一〇三四四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－1068－8324

中川修亭肖像

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

凡　例

一、本書第一一二巻「中川修亭」には、『医方新古弁』『真庵漫筆』『医道』を収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略したところもある。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本、写本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『医方新古弁』　写本　二巻一冊（京大富士川文庫）

『真庵漫筆』　写本（天保十一年写）一冊（大塚恭男所蔵）

『医道』　版本（文政十一年版）一冊

一、解説は松田邦夫（日本東洋医学会監事）が執筆した。

一、巻頭の中川修亭肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（刀江書院）によった。

中川修亭

松田邦夫

中川修亭小伝

中川修亭（一七七一―一八五〇）は、吉益南涯の高弟で、古方の大家であるが、後世方にも理解をもち、さらに華岡青洲を友とし、外科蘭方にも通じていた名医である。

修亭の生い立ち

修亭は名を故又は定故といい、字は其徳、号は壺、また壺山、通称は周貞、しばしば修亭の字を用いている。その他抱神堂主人とも号した。

『華岡青洲先生及其外科』では、修亭は明和八年（一七七一）に生まれ、嘉永三年（一八五〇）に、七十八歳で死んだとあるが、七十八歳は八十歳の誤記であろう。

紀州の生まれとされるのは誤りであることは、『医方新古弁』に「予、京師に生まれて唯だ京師の医を見聞す」とあり、『松浦答問』の序でも、「平安中川故其徳於紀州伊都郡東家村撰」とあるのによっても、修亭の故郷を紀州とするのは正しくない。富士川游も修亭を京師の人としている。

修亭は始めに、京都の鈴木蘭園（一七四一―一七九〇）について医を学んだが、この人は後世派の医家であったといわれている。ところが天明八年（一七八八）正月、京都大火にあったので紀州那賀郡平山村に往き、華岡青洲の門人になったとされるのが通説で、『華岡青洲先生及其外科』では、中川修亭を青洲の最初の門人として記録している。

ところで大塚敬節先生は、修亭と青洲は親しい友人の間柄であって、師弟の約を結んだものではないことを論証されている。大体、修亭を青洲の門人とする根拠は、青洲の側にある門人帖によったもので、修亭の側の資料は全く無視されている。私も今回修亭の著書を読んでみて、全く大塚先生の云われる通りであることを知った。私の見出したところを加えて以下に引用する。

修亭と青洲との交友

華岡青洲は宝暦一〇年（一七六〇）に生まれて、天保六年（一八三五）に七十六歳で死んでいるので、修亭は青洲より十一歳若いことになる。

通説では修亭が青洲の弟子になったのは、青洲が紀州に開業して三年目で二十九歳、修亭は十

八歳であったということになっている。その頃の青洲はまだ天下に高名を馳せるほど有名になっていたのではなく、従って門人帖などあろう筈がなく、その門人帖に修亭が自ら署名したのではなく、いうところの門人帖は、後から作られたものであろうと大塚先生は述べている。

青洲は吉益南涯の門人として、また大和見立の門人として京都に遊学中に、修亭と親交を結んだことは『女科筌蹄』を見ても分かる。そこで、京都で火災にあった修亭は、旧友を頼って紀州に行ったのであろう。

一、修亭の著『女科筌蹄』の児枕痛の項で、修亭は次のように述べて、青洲と親しく友人として交っていたことについて述べている。

「予、成童の比、花岡伯行、京に出て勤学せり。数々会して医事を談じたるに云々。」

二、寛政五年（一七九三）に、修亭が書いた『松浦答問』は、もと泉州左界（堺）に住み、後に紀州の丸栖に隠棲した名医の松浦南陽を青洲と一緒に訪ねた時のことを問答体に記したもので、その序文に修亭は、「同胞花岡伯行と往きて其の説を叩く云々」と書いている。寛政五年は、青洲の門人帖によれば、修亭は既に青洲の弟子になっていた筈である。修亭ともあろうものが、自分の師匠を同胞と呼ぶ筈がないではないか。

三、本書に収載された『真庵漫筆』は、修亭の門人達が筆録したものであるが、次の一節がある。

「舌疽と唱うるは（中略）漢名舌疳なり。花岡随賢この舌疳を療すること数人なりと雖も多くは廃人となれり。余、薫剤を用うることを云いきかせしなれどもとかく用いられざりき」。

随賢というのは、青洲の祖父以来の称号で、青洲は三代目随賢である。この文で分かるように、師弟の間の口吻ではない。

四、同じく『真庵漫筆』より。

「疔毒の内攻は多くは不治に至る。往年は黄連解毒或いは大承気湯を与えしに効なし。今考うるに附剤を用いさえすれば効あり。不治に至るものなし。是等は花岡にてとんと知らざることなり」。

五、同じく『真庵漫筆』より。

「陰状のものは附子の効あるものなれども、梅毒にてはとんと効なきものなり。花岡氏こじつけて奇良附子湯と云う方を用いらるれども更に効なきなり」。

六、同じく『真庵漫筆』より。

「吾が朋友外科に長ぜる者は各務、花岡、熊代なり。その中、術は花岡長ぜるなれども、才は熊代長ぜり」。

七、同じく『真庵漫筆』より。

予が母、昔年紀州に於て痢疾を患い、昼夜百六十度も圊に上り、余程の劇症なり。花岡老人も来り診し、色々治を尽くしくれられたりとても、全快むずかしきように思うゆえ、夜通しに京都

へ飛脚をたて、南涯翁に容躰書を遣わし按方を尋ねたりしに返書来り、ひらきみるに方は桃承に兼用は梔子干姜湯なり。花氏は必ず下剤はあしきほどに云われたれども、花氏には知らさず明朝までに二貼も用いたり（これによってさしもの便数が減ずる。はじめ大黄、芒硝を少量用いていたが、増量して用いると著効があり、遂に全快した）。

八、『女科筌蹄』より。

「乳岩は古来其の治を難にして全治を聞くこと稀なり。近来金創法を以て治すると紅毛の法の如く云いたるを、岩永氏其の治法を試みたれども一旦治を得ても後遂に生を全うせず。一、二人を試みて後は施さずと其の門人語れり。花岡伯行は岩永氏に瘍科を学べる故に其の事を聞きたるにや、数百人を療するに生を得る者甚だ稀なりと云えり」。

○　○　○

修亭は青洲を同胞と呼び、また朋友と呼んでいるところから、師として仕えたのではなく、親しい友人として交遊していた。また修亭が青洲をどのように評価していたかも窺うことができよう。

以上の修亭側の資料によって、中川修亭を華岡青洲の門人とする通説は否定されるべきであると私も考える。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

修亭、南涯の門に入る

さて修亭は紀州に在ること数年の後に京都へ帰り、古医方の吉益南涯の門人となった。その年は青洲の年譜（宗田一氏）によれば寛政五年（一七九三）であり、修亭二十三歳である。

これより修亭は吉益流の古医方の研究に精進する。

『真庵漫筆』で、「我生まれてより海内に名医と称すべきもの、南涯翁、中神琴溪翁、和田東郭翁、冨野玄達この四人なり」と、修亭が門人に語っているのをみても、修亭がいかに南涯を尊敬していたかが分かる。

吉益南涯（一七五〇―一八一三）は吉益東洞（一七〇二―一七七三）の次男で、万病一毒の古医方を唱えて一世を風靡した医傑父東洞の亡きあと、一門の総帥であった。天明八年の京都大火の後、大阪船場伏見街堺筋に移っていたが、寛政四年（一七九二）、京都に引きあげて三条東洞院西の旧地に居宅を構えた。当時父説を拡充して気血水説を立て流行していた。修亭の入門時、南涯は四十四歳、脂の乗り切った時であった。

「吉益南涯」（本集成37巻）解説で既に述べたように、小川鼎三博士はこの時代を「日本のルネッサンス」と語っているが、南涯の時代は実に容易ならぬ時代で、保守と革新の国内学派間の論争が激化する一方、外国医学が入ってくるという動乱の時代であった。

そして南涯と修亭の関係は、本集成の「吉益南涯」のところで詳説したように、修亭は南涯の

没後六年目の文政二年（一八一九）に、自分の記録他をもとに南涯の治験録を記した『成蹟録』（本集成38巻収録）を著し、さらに巻末に『南涯先生六十寿序』を付して、「南涯先生の徳を知る者が日毎に少くなってゆくのを黙していられずに記した」と述べている。修亭はその中で、南涯を擁護し、また入門する弟子の質が時代の影響で低下し、その教育に南涯が苦心した様子などを知ることが出来る。

すなわち『真庵漫筆』によると、

「東洞先生の時は天下古方の乱れたるを以て一見識をたて病名を削られて方を処せられしなれども、南涯先生に至りては世間蘭方の行われるようになりて、東洞先生の通りにては人の気服せざる故、上へ迫る、下へ陥るものと、段々委しきことをいいて教えられし」とあり、また、

「今世の風、日に漸く澆薄、門に入り教えを受くる者、或いは軽佻にして自守すること能わず、或いは孱弱にして自奮すること能わず。故に或いはその旧規を新たにし、委曲誘導以て之に応ず。而して上工の出でざるは実に時勢の然らしむるところなりや」

と述べている。

蘭学を学ぶ

文化二、三年の頃、海上随鷗が京都に来て蘭学塾を開いたので、学問好きの修亭はさっそくそ

の門に入って蘭学をかじった。随鷗の門人帖『社盟録』によれば、

文化三年（一八〇六）九月上旬　浪華　中川修亭　故（花押）

と出ている。「浪華」とあるので、その頃修亭は大阪に住んでいたことがわかる。修亭、時に三十六歳であった。

その後文政五年（一八二二）に、蘭学者藤林普山の『和蘭薬性弁』が飜訳出版されている。この書の協力者として

京都　中川修亭　故

の名が挙げられている。藤林淳道、普山は随鷗の門人帖『社盟録』によれば、文化三年五月、修亭より少し早くに入門しており、修亭が同門の普山に助力したのであろう。時に修亭五十二歳。

晩年の修亭

修亭はどういうわけか、京都に住んだり、大阪に移ったり、よく居処をかえた。文化十二年（一八一五）『本朝医家古籍考』を著わした。これは古来のわが国の医書六十七点についての彼の調査記録で、その頃は京都御幸町姉小路上ルに住んでいた。

文政時代に入ってからは大阪に住むことが多くなったようである。すなわち文政の初年・三年・五年・八年の大阪医者番付や『海内医林伝』（山本善太著、文政十一年刊）などに中川周貞あるい

は周亭で名が出ている。しかし文政五年版の『平安人物志』、同十三年版（一八三〇）の『京都医者一覧』にも彼の名が出ている。

『平安人物志』文化十年版（一八一三）には当時のエリート医家五十四名の中に、

中川故壺山　御幸町姉小路北

とあり、その他、中神琴溪、太田徳本、川越衡山、百々漢陰、和田哲、吉益北州などの名が見える。

『海内医林伝』文政十一年刊（一八二八）には、

安土町　古今折中傍及西洋　中川修亭

とある。大阪では、はじめ島ノ内に住み、それから上町に移り、文政末年以後は安土町で開業している。

○　○　○

嘉永三年（一八五〇）二月六日、修亭は八十歳の長寿を以て生涯を終った。

洛西、太秦の法雲院墓地に図南中川先生墓というのがある。図南は修亭の父修三の号である。碑文は「男定故」、すなわち修亭の撰である。この寺に修亭の過去帳があり、修山直

『海内医林伝』に収録される
中川修亭（『京都の医学史』より）

翁居士という法号を誌し、「大阪難波にて死」と付記してある。しかし修亭の墓は、京都でも大阪でも見つかっていない。

修亭の医術

中川修亭が優れた臨床家であったことは、『成蹟録』や『険証百問』の他、『真庵漫筆』などにより窺われる。

彼は古医方を尊ぶ古方の大家であったことは『医方新古弁』から明らかであるが、実際の臨床にあたっては、後世方をも尊重したようである。たとえば『真庵漫筆』の「正水石水」の項で、『金匱要略』の条文の意味は明らかでなく、治療の困難なものが多いが、後世方にて効を得るものが多いとして、赤小豆剤、鯉魚剤、梹榔剤を挙げている。前述『海内医林伝』でも、修亭の専門科目を「古今折中」としている。

修亭が外科を能くしたことは『真庵漫筆』の「壺山君茶話」に次の記載があることからも知られる。

「金創はまずきずを焼酎にて洗い、よく瘀物を去り(略)、縫いて後も酎にて上をよくふき、その上に雞卵の白味ばかりをつけたる木綿を一、二枚敷きて(略)、翌日卵木綿ひっついてあるものゆえ、それを酒にてよく上より浸して去り、(略)五日目あたりに、縫いたる糸を毛引きにて少し動

かし見るべし。糸ぐすぐすするようになりていれば、たとえば六処縫いてあるものなれば一糸ずつ間を置いて切るべし。余糸は其の翌日切るべし。其のはじめ切りたる糸もそのままにて置き、次の日抜き去るべし。花岡にて縫い糸を広くかくれども、つづまる処を考えみるに挾くかけるほうがよし」。

『真庵漫筆』には、「花岡家膏法抜萃記」があり、白雲膏、左突膏、破敵膏など載っている。修亭の門人が青洲のところへ国内留学して教わって来たのであろう。

修亭の著に『麻薬考』があるが、彼が若いときに麻薬すなわち麻酔薬の研究を続けたことが推察される。この書は写本で伝わり刊行されておらず、修亭の自序は寛政八年（一七九六）で、修亭二十六歳である。

○　○　○

この修亭が駆梅用の水銀剤製造を研究したという新事実が宗田一氏によって明らかにされた。（『薬事日報』第二四〇二号、昭和三十四年）。修亭の著に『升汞丹製法秘録』（文化五年筆写本）があり、彼の三十八歳の時である。

中川修亭が水銀剤の製法研究にうちこんだということは、彼の経歴に一つの新知見を加えたものとして重要であるが、解剖学を通じて、親試実験を旨とする当時の進歩的な上方の医家達の間に共通した鋭い科学精神の一つのあらわれであったであろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo